

- INDEX 2 SATREPS始動／第2回模擬AUローンチ・イベント 3 留学プログラム実施報告／IAEA事務局長来校 4 5 卒業するみなさんへ
6 2024就職状況・2025就職活動 7 金・ルビー・銀・銅祝式典 8 上智大学通信フルリニューアルのお知らせ

卒業おめでとう 未来を創る力を信じて



上智大学長
曄道 佳明



皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。また、ご父母、ご関係の皆さまにも心よりお祝い申し上げます。高校、大学でのコロナ禍の困難を乗り越え、学位に到達した皆さんに対して、上智大学を代表して、心からの敬意を表しつつ祝辞を述べさせていただきます。

オーストラリアの心理学者たちの著作に「未来を発明したサル」という書籍があります。この書では、現在の人類が、多くの類人猿の中で競争優位に立った大きな要因として、未来を予測する能力の獲得を挙げています。私たち人類の競争優位性については諸説ありますが、この理由づけにもなるほどと思わせるものがあります。確かに、食物を計画的に手に入れる、蓄える、敵対者の来襲に備えるなど、リスク回避の面からもこの能力は競争優位に立つ上での決定的な力となったことでしょう。反対に、この優位性によって人類がこの社会を築き上げてきたからこそ、私たちは、現在直面している見通しの効かない社会、予測不能な社会に対して大きな不安を覚えているのだと思います。

未来を予測する、展望することは、社会の行く末を占うことのみならず、自分自身の人生設計においても、その重要性が認識されることでしょう。しかしここでは一旦、過去に目を向けることについて考えたいと思います。今日この学位授与式において、私は皆さんに「社会の今は必然か」と問いかけたいと思います。現在の社会を俯瞰す

るとき、もちろん人類ならではの社会の発展、例えば政治・経済の仕組み、社会制度の整備、技術の進展など肯定的に評価できるものがある一方で、環境悪化、貧困、格差、難民、不平等の存在など緊急を要する解決すべき課題も山積しています。この「今」に至った根源はどこにあったのでしょうか？あるいは単なる偶然の重なりが今を生んだのでしょうか？

バタフライエフェクトという言葉があります。カオス現象を説明する際に例えられたものですが、ブラジルの一匹の蝶の羽ばたきが、アメリカテキサス州での竜巻を引き起こすか、という問いかけで、今では、ほんの小さな出来事が後にとつともなく大きな事象を生み出すことの象徴として使われています。社会の今を考えると、この状態、事態を招いた根源を具体的に特定することはできません。例えば現在の地球環境悪化の問題は、一つの原因を追求し、特定し取り除くことで解決ができるわけではないのです。では、今は必然ではなく偶然なのでしょうか？私たちは不可抗力や偶然の組み合わせが今を生んだのだと言い逃れることができるのでしょうか？

皆さんの人生にもぜひこの問いかけを当てはめてみていただきたいと思います。皆さんの今は必然か？あるいは10年後の自分の姿は、今まで、そしてこれからの皆さんの歩みによって必然として生じるのか？これは人生に対する大きな問いかけであると思います。今の自分を考えれば、その

個性、信念、志を形作った要因は何か一つではないはずです。学校での学びはもちろんですが、日々の家族との会話、友人との談笑、社会との対話などの一つ一つが、自分自身の内部でバタフライエフェクトを引き起こし、今の皆さんを形作っているのではないかと思います。

皆さんの大学での学びの成果に対する実感はどのようなものですか？2年間、4年間というスパンで見ても、皆さんが実感したその経験は、10年、30年、50年後の自分に大いなる影響を与える可能性があります。ぜひ皆さんには肯定的な意味でのバタフライエフェクトを引き出す自覚と感性を持っていただきたいと思います。過去の経験が、今の挑戦が、これからの何かが、直ちにではないかもしれませんが、将来の自分に大きな影響を及ぼすであろうという期待を込めて人生を設計していただきたいと思います。そのときどきの自分は必然なのか、これは断定的な解のない問いかけではありますが、私たちは常に問い続ける必要があると思います。

学位授与式では、カトリック・イエズス会センター長から、ヨハネによる福音書の一節が紹介されました。平和を愛する人の継続的な学びについて説かれたものです。真の平和の探求者として実存的な学びが要請されています。残念ながら私たちの日常の中には、平和を損なう様々な事象のニュースが溢れています。皆さんが皆さん自身の役割について考え、広い意味での学びを継続し、平和の探求者であり続けてください。平和の探求という大きな課題こそ、バタフライエフェクトのように世界中の一人一人の日々、日常の意思表示や行いがもたらす必然が期待されるものだと思います。

日々の学び、日常にある小さな挑戦、思ってもみなかった経験、そしてときに不測の事態への向き合い、これらを経る私たちの歩みは、いずれ自分自身の人生、あるいは社会を創造的に変容させる何かを引き起こし、導いているかもしれません。少なくとも、皆さんの大学での学び、研究は、その導きを生み出すに十分に足る経験と言えます。For Others, With Othersを教育精神とする上智大学の卒業生、上智大学大学院の修士として、その導きにはぜひ弱き立場への眼差しが、眼光鋭く向けられているものと切に願います。

ご卒業、誠におめでとうございます。

聖書のみことば【ヨハネによる福音14章23～27節】

イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。

わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。しかし、弁護士、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」

祝福の祈り

愛の神よ、無限の愛の驚くべき交わりよ、わたしたちに教えてください。宇宙の美しさの中で、すべてのものがあなたについて語る場で、あなたを観想することを。あなたがお造りになったすべての存在にふさわしい、賛美と感謝を呼び覚ましてください。存在するすべてのものと深く結ばれていると感じる恵みをお与えください。

愛の神よ、地球上のすべての被造物へのあなたの愛の道具として、この世界でのわたしたちの役割をお示しください。あなたに忘れ去られるものは何一つないからです。無関心の罪に陥らせず、共通善を愛し、弱い人々を支え、わたしたちの住むこの世界を大切にできるよう、権力や財力をもつ人々を照らしてください。

貧しい人々と地球とが叫んでいます。おお、主よ、すべてのいのちを守るため、よりよい未来をひらくため、あなたの力と光でわたしたちをとらえてください。正義と平和と愛と美が支配する、あなたのみ国の到来のために。あなたはたたえられますように。アーメン。

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。これからも益々、この世の様々な場所で、神からの知恵を活かし、真の平和のための継続的な研究を実行する者になられますように。

カトリック・イエズス会センター 副センター長
アントニウス・フィルマンジャー

地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム SATREPS が始動

私立大学として唯一の採択

外国語学部フランス語学科の岩崎えり奈教授が主導する研究課題が、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS サトレップス)」に採択され、今春から本格始動する。2023年度に61課題の応募から10課題が選ばれ、本学は私立大学として唯一の採択となった。

研究テーマは「エジプト西部砂漠のオアシス社会における住民の理解と参画を軸とした水・土地資源の持続的利用モデルの構築」。中東北アフリカ地域の社会経済を専門とし、同地域にお

いて15年間の研究実績を持つ岩崎教授がリーダーとなり、社会学者と自然科学者からなる研究チームが文理連携による独創的なアプローチでエジプトにおける水資源の課題解決に取り組む。本学が有するイスラーム地域研究所、アジア文化研究所、地球環境研究所など、複数の研究拠点を活用し、これまで培ってきた知見に基づき持続的・包括的なオアシス地域管理手法の提案を行う予定だ。

岩崎教授は「稀少な水資源の管理という課題は、日本人にとっても他人ごとではない問題。エジプト人研究者と



岩崎教授(左から3人目)とJICAおよびエジプト側カウンターパート

日本人研究者が協働して、オアシスの水資源を科学技術とオアシスの長い歴史で培われた知恵を組み合わせることで管理する仕組みを構築していくことを目指しています」と語る。

本プロジェクトを通して、現地住民と協働し、同地域の灌漑農地において拡大する塩害の抑制と土地の持続的利用に向けた新たな知の創造が期待される。

第2回模擬アフリカ連合会議のローンチ・イベントを開催 各国の若者へ共創を呼びかけ

3月3日、本学は第2回模擬アフリカ連合会議(模擬AU)のローンチ・イベントを開催した。模擬AUは、アフリカ連合(AU)加盟国の協議を学生が各国代表に扮して議論するイベントで、上智大学、国連開発計画(UNDP)、国際協力機構(JICA)が共催している。

第2回模擬AUは「Inayojumuisha*: 若者の共創、アフリカの未来を形作る」をテーマに、第9回アフリカ開発会議(TICAD9)に合わせて2025年8月に横浜で開催予定。若者の声のアフリカの未来を切り開く中心的な役割を果たすことが期待されている。

*スワヒリ語で「包括的」「包摂的」の意味

今回のイベントでは、第1回模擬AUの振り返りや第2回模擬AUの概要説明が行われた。開会挨拶では暁道佳明学長が登壇し、続いて外務省アフリカ部参事官の村上顕樹氏が日本とアフリカの共創の重要性を語った。

第1回模擬AUに参加した学生らによるトークセッションでは、アフリカに対する固定概念の克服や日本とアフリカの若者が共創する意義が議論された。また、第2回模擬AU参加者に向けて「十分な準備と俯瞰的な視点を持ち、議論を深めてほしい」といったメッセージが送られた。

その後、UNDP総裁補兼アフリカ



トークセッションでは第1回模擬AU参加者からのエールが送られた

局長のアフナ・エザコンワ氏が登壇し、若者世代のリーダーシップや国際協力の重要性について語った。最後に、第2回模擬AUの概要説明が行われ、模擬AU実行委員会の認証式が実施された。

閉会挨拶では、JICA理事長特別補佐の中村俊之氏が「若者が新たなパートナーシップを構築し、未来の課題解決に貢献してほしい」と呼びかけ、イベントを締めくくった。

オーストラリア国立大との協働プログラム 移民、難民問題解決に向けて議論

2月12日～18日にかけてオーストラリア国立大学(ANU)との国際協働学習プログラム「オーストラリア・サミット・プログラム」が本学にて実施された。本プログラムは23年度にキャンベラで初めて実施され、本年度はANUから8人、本学から12人の計20人の学生が参加した。両国が直面する社会課題の解決と理想とする社会の実現に向けて、毎年異なるテーマに対して日豪両国間でコミュニケ(提言書)を取りまとめている。

今年度のテーマは“Migration, Refugee

and Asylum in the Asia-Pacific”。参加者たちは、世界が直面する移民、難民、亡命者の受け入れに関する綿密な事前学習を行ったうえで、両大学5つの学部の計8人の教授陣から講義を受講。国境を超えた多様な視点でテーマについての知見を深めると同時に、熱心な質疑応答やグループディスカッションを通して、両国における社会課題の洗い出しや意見交換を行った。サミット最終日の閉会式では、ゲストとして在日オーストラリア大使館から職員を迎え、各校から1人ずつ代表がコ



出入国在留管理庁職員からも講義を受けるなど、入念な事前学習を行った

ミュニケを表明したのち、両大学間で採択した。

参加者は「専門家の講義を受けてコミュニケを構築できたことや、異なる大学の学生と協力して多くのことを議論できたことはもちろん、交流を通じた文化の違いや共通点を学ぶ機会も得られたことは今後大きな財産になると感じた」と振り返った。



世界中から44校80人が参加

部史学科)が登壇し、本学の状況を踏まえた発表を行った。さらに、日本の高等教育機関の国際化の取り組みや展望について、文部科学省高等教育局参事官(国際担当)の佐藤邦明氏の講演が行われた。また、菊地功枢機脚の主司式のもと英語での特別ミサも執り行われた。

参加者は活発な議論を通じ、社会課題に対して大学が担う役割の重要性を再認識するとともに、新たな国際連携や協働の可能性を探る貴重な機会となった。

香港教育大学と修士レベルの

ダブル・ディグリープログラムを開始

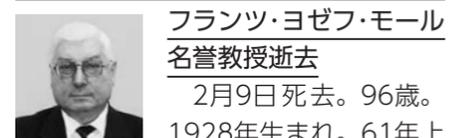
本学大学院地球環境学研究科は、教育学分野で世界的に高い評価を受ける香港教育大学と連携し、修士レベルのダブル・ディグリープログラムを開始する。本プログラムに係る協定は昨年12月6日に締結されており、実際の学生派遣および受け入れは2025年度秋学期以降に開始される予定だ。

ダブル・ディグリープログラムは、協定先の大学と連携することで一定期間中に複数の大学の学位を取得できる制度。学生は、それぞれの大学への1年間の留学を通じ、両大学が定める所定の修了要件を満たした場合には、本学で環境学修士号、香港教育大学で教育学修士号の両方の学位を取得することができる。

本プログラムでは、環境学と教育学という異なる専門領域を融合させ、社会課題に対する新たなアプローチを探求する。持続可能な社会の実現に向け、多角的かつ学際的な視点で課題解決に取り組む人材の育成が目的だ。本学と海外大学とのダブル・ディグリープログラムは、イギリスのロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(SOAS)との修士プログラム、タイのチュラロンコン大学との修士プログラムに続き、3校目となる。



香港教育大学で行われた協定締結の調印式



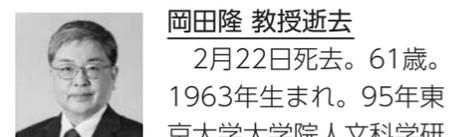
フランツ・ヨゼフ・モール 名誉教授逝去

2月9日死去。96歳。

1928年生まれ。61年上智大学大学院神学研究科神学専攻修士課程修了。55年本学文学部ドイツ文学科講師、58年本学外国語学部ドイツ語学科講師、73年同教授、94年外国語学部特選教授、97年同特別契約教授。99年から本学名誉教授。

1971年～2004年上智学院財務担当理事、1984年～86年上智学院財務部長兼務、2004～05年上智学院顧問(財務)等を務めた。

著書に『ドイツの新聞のドイツ語』(三修社)、『Deutschland die Mitte Europas』など。専門は神学、哲学。



岡田隆 教授逝去

2月22日死去。61歳。

1963年生まれ。95年東京大学大学院人文科学研究科心理学専門課程(博士課程)修了。2008年本学総合人間科学部心理学科准教授、09年同教授。

2011年～13年総合人間科学部心理学科長、17～21年総合人間科学研究科委員長、21年より学術研究担当副学長を務めていた。

著書に『生理心理学：脳のはたらきから見た心の世界 第3版』共著(サイエンス社)、『臨床の質を高める基礎心理学』分担執筆(文光堂)など。専門は生理心理学。

国際イエズス会大学連盟の国際教育会議をホスト開催

2月26日～28日にかけて、International Association of Jesuit Universities (IAJU: 国際イエズス会大学連盟)主催の国際教育会議が四谷キャンパスで開催された。本学を含む、IAJUに加盟する教育機関44校から国際教育担当の教職員およそ80人が参加した。

IAJUは、アメリカのジョージタウン大学や韓国の西江大学などイエズス会を設立母体とする50カ国以上200を超える高等教育機関が加盟する国際的なネットワークである。本会議は、国際教育分野にかかる世界中の教育機関の知見の共有と議論の深化に加え、機関同士の連携のさらなる強化を

目的として、ホスト校を変えながら隔年で開催される。

初日には、IAJUのPresidentである議長ジョセフ・クリスティー神父による開会宣言の後、暁道佳明学長が「革新的なアイデアや優れた取り組みを共有し、各機関をつなぐ絆を深める機会にしてほしい」と歓迎の挨拶を述べた。

「国際化への挑戦と機会」のテーマのもとで行われた本会議のなかで、クリスティー神父ならびにAssociation of Jesuit Colleges and Universities-Asia Pacific (AJCU-AP: アジア太平洋・イエズス会高等教育機関連盟)会長であるロベルト・ヤップ アテネオ・デ・マニラ大学長による基調講演のほか、パネルディスカッションやレクチャーには本学から杉村美紀教授(総合人間科学部教育学科)や川村信三教授(文学

2024年度 派遣・受入留学プログラム実施報告

2024年度の留学環境は、昨年度を上回る多くの本学学生が長期・短期ともに様々な留学プログラムを活用して海外に飛び立ったと同時に、前年度に引き続き、海外から多くの留学生を受け入れた。交換留学では、世界35カ国に約350人を派遣し、2025年度に出発する学生は、さらに増える見込みだ。

長期休暇中の短期プログラムについては、夏期は語学講座11コース、短期研修7コース、実践型プログラム6コースに計307人が参加、春期は語学講座11コース、短期研修4コース、実践型プログラム4コースを実施し、計270人が参加した。短期プログラムは海外に限らず国内で実施することもあり、長期留学に比べて参加しやすく、多様でグローバルな学びの機会になったとの声を聞くことが出来た。

交換留学受入生については、春学期・秋学期ともに300人を超える学生が新たに渡日し、依然として増加傾向にある。留学生たちは本学で授業を履修するかたわら、英語落語などの文化体験

イベントやNPO法人アルペなんみんセンターでのボランティア、本学学生団体が主催する交流イベントやサークル活動にも参加し、充実した時間を過ごして帰国した。

また、12月と1月にはグローバル教育センター学生職員の企画によりSophians' Loungeを初開催。留学希望者と現地出身の学生が連絡先を交換する場面などもあり、在學生と留学生が気軽に交流できる場として学生の満足度も高く好評だった。

大学では、グローバルな学びの更なる促進のため、様々なプログラムの提供や多方面での支援を続ける。一方、世界情勢は常に不安定であるため、留学希望者は、引き続き日本および滞在予定国の感染症や治安面のリスク、自身の語学力や危機管理対応能力の有無も慎重に見極めながら留学計画を立てることが不可欠との自覚を持ち、多様な留学機会に積極的にチャレンジしてほしい。ここでは交換留学(派遣)および海外短期プログラム参加者の体験談を紹介する。

体験談 交換留学

(フランス・リール大学)
東田 啓汰(外仏4)

リール大学では、現地学生向けの授業を履修していたため、留学当初は授業を理解するのに大変苦労しました。そこで、教授や友人から助言を貰いつつ、先生に許可を取って授業内容を録音し、復習することを10カ月間、欠かさず続けました。



学業以外の面では、日仏交流学生団体の活動や移民難民支援を行うNGO団体でのボランティアに参加しました。また、文部科学省トビタテ！留学JAPAN新・日本代表の同期15人と共にパリにて日仏学生映画祭の企画・運営を行いました。留学中、何度も壁にぶつかり挫けそうになりましたが、「やらぬ後悔よりやる後悔」という言葉を胸に、チャレンジし続けた10カ月間でした。この留学を通じて、失敗を怖がらずに自ら行動を起こし挑戦する重要性を学ぶことが出来ました。

今後は、留学中に「Made in Japan」の製品の素晴らしさを何度も感じた経験から、日本が誇れるモノやコトを世界中の人々に届けていきたいです。

体験談 短期研修

(イギリス・オックスフォード大学)
居初 咲佳(経営3)

オックスフォード大学では、政治・メディア・文学に関する講義を2週間受講しました。少人数制の授業では、一人一人の意見が求められるため、自分の考えを言語化することに苦戦しましたが「問いに対する正解はない」という前提のもと、学生の意見を尊重してくれる教授のおかげで、自分なりの考えを発信できました。



特に印象に残っているのは、AIの進展がもたらす影響についての講義です。現役ジャーナリストの講師から「気づかれていない価値を提供することが自分の役目だ」と学び、AIが提供できるものは単一的である一方、人間の価値観は多種多様であり、そこに私たちの存在意義があると実感しました。今後も幅広い知識と経験を積み、他者の価値観を認められる人材を目指したいです。

また、普段の大学生活では出会えない学生たちと学年を超えて交流するなかで、それぞれの生き立ちや苦労を知り、困難を乗り越えながら自分の夢に向かう姿勢に多くを学ぶ貴重な機会にもなりました。

国際原子力機関 (IAEA) グロッシー事務局長来校

今後の連携強化に向けた協定を締結

2月20日、ウィーンに本部を構える国際原子力機関(IAEA)より外務省賓客として来日したラファエル・マリアーノ・グロッシー事務局長が四谷キャンパスを訪問し、本学との今後の連携に向けた「協力に関する覚書(Practical Arrangements)」の署名式および在學生との交流会が開催された。

今回の交流は、今年1月、曄道佳明学長がIAEA本部を訪問し、現地で事務局長特別補佐官の金子智雄氏と、本学学生のインターンシップ派遣の可能性について協議したことを契機に実現した。

「協力に関する覚書」の締結に際し、今後本学とIAEAが、国際社会への貢献を目的とし、人材交流や研究活動をはじめとする様々な面で協働していくことが確認された。

続く交流会には、国際関係論や環境分野を専攻する学生を中心に、15人の大学院生と若手研究者が参加。国際協力人材育成センター所長の植木安弘特任教授司会進行のもと、グロッシー事務局長よりIAEAの最新の活動内容を概説する基調講演が行われた。

後半の懇談では、アフリカ地域でのがん治療への支援状況や、福島ALPS処理水の環境データ開示の手法について等、学生から多様な質問があり、グロッシー事務局長からは、現状の問題点や今後の展望を含めた具体的な回答があった。



在學生との交流会ではさまざまな質問が飛び交った



署名式では今後の協働が可能な分野と目的が改めて確認された

閉会にあたり、グロッシー事務局長は、「国際協力や国際機関との連携に積極的に取り組む大学で学び、研究できることは非常に恵まれています。この環境や機会を活かし、将来に向けて引き続き努力されることを期待しています」という言葉で学生たちを激励した。

本学は、今回の「協力に関する覚書」の締結により、インターンシップ協定の締結や更なる連携強化に向け、引き続きIAEAと共に取り組んでいく。

グローバル教育センターからのお知らせ

2025年度春学期留学プロモーション月間

■春学期留学ガイダンスと情報入手方法

4月10日と14日の昼休みに本学の留学プログラム概要を説明する留学ガイダンスを実施する。加えて、春学期中の各種留学プログラム情報や募集、実施スケジュールは、4月に2号館1階、メインエントランスにポスター掲示を行う。

また、グローバル教育センターからの各種案内は、My Sophia(大学からのお知らせ「留学・国際交流」やファイル共有など)で見ることができる。グローバルな学びに興味のある方は、定期的に確認してほしい。

■夏期休暇以降実施予定のプログラム募集について

交換留学は25年春開始分の学内選

考願書受付を6月初旬に実施する。詳細は4月中旬以降Loyolaで公開予定だが、応募検討中の方は、過去の募集要項の確認や出願に必要な語学スコアの取得等は進めておくことを推奨する。

夏期休暇中の海外短期プログラムについては、4月中旬のお昼休みの時間帯に説明会(対面)を実施予定。

短期プログラムへの参加を希望する学生は、説明会に参加したうえで検討してほしい。

■留学カウンセリング

2025年度も在學生向け留学カウンセリングが利用可能。常駐の留学カウンセラーへ留学に関する相談が対面、オンライン可能。1枠あたり30分の完全予約制。日英で可。大学の制度に関する質問に留まらず、留学全般の相談や将来の留学に向けた相談も可能なので、積極的に活用してほしい。

教皇フランシスコ来学記念表彰 個人表彰3人・団体表彰3団体が受賞

3月4日、「2024年度(第5回)上智学院教皇フランシスコ来学記念表彰式」がカトリック・イエズス会センターで執り行われた。

上智学院は、2019年11月に教皇フランシスコが本学を訪問された記憶を永くとどめるために「教皇フランシスコ来学記念基金」を創設。基金は、教皇のメッセージ「叡智の座の大学で学ぶ者へ」に示された、さまざまな課題への取り組みを支援するものであり、貧困や社会的弱者の課題、多文化共生社会の実現などに取り組む活動が広がることが目的とする。

今回は、個人表彰3人と団体表彰3

団体の6件が選出され、サリ・アガスティン理事長から表彰状、大塚寿郎総務担当理事から副賞がそれぞれに授与された。

受賞者は次のとおり。

【個人表彰】

■水谷裕佳(上智大学グローバル教育センター教員)：沖縄の自然環境と歴史や文化の保護に寄与するアウトリーチ活動

■Rosa Barbaran(上智大学国際教養学部卒業)：日本における難民の支援活動

■柳谷晃子(上智大学大学院神学研究科神学専攻修了)：日常生活のなかでキリストを生きてキリストを伝える



全員で記念撮影

【団体表彰】

■特定非営利活動法人 YNF(代表：上智福岡中学高等学校卒業 江崎太郎)：自然災害における災害ケースマネジメント実践

■上智大学ローバース(代表：経済学部経営学科3年 江口亮太)：珠洲市教育支援プロジェクト

■上智大学フェンシング部(代表：経済学部経営学科2年 竹内崇泰)：東京パラリンピック出場選手と学ぶ「車いすフェンシング体験会」

おつかれさまでした

本年度退職教職員

長年本学の教育・研究に尽力された教職員が、3月31日付で退職する。退職者を代表して、外国語学部ロシア語学科の村田真一教授と職員の大日方賀代子さんに寄稿いただいた。

■教員

〈専任教員の定年退職〉

佐藤朋之(文学部ドイツ文学科)、小倉博孝(同フランス文学科)、渡邊久哲(同新聞学科)、高山恵理子(総合人間科学部社会福祉学科)、島田真理恵(同看護学科)、北村喜宣(法学部地球環境法学科)、石井紀子(外国語学部英語学科)、幡谷則子(同イスパニア語学科)、村田真一(同ロシア語学科)、David H. Slater(国際教養学部国際教養学科)、安増茂樹(理工学部物質生命理工学科)、坂間弘(同機能創造理工学科)、北村亜矢子(言語教育研究センター、小柳かおる(同)

なお、4月以降、渡邊教授、北村喜宣教授、幡谷教授、Slater教授、安増教授、北村亜矢子教授、小柳教授は、特別契約教授として引き続き在任する。

〈特別契約教授の契約期間満了〉

高柳和雄(理工学研究科理工学専攻)、水島宏明(文学部新聞学科)、湯川嘉津美(総合人間科学部教育学科)、長谷川二ナ(外国語学部イスパニア語学科)、平野幸治(短期大学部英語科)

■職員

〈専任職員の定年退職〉

大日方賀代子(総務局環境整備グループ)、原田和典(同)、南保政弘(同)、佐々木睦(短期大学部事務センター)、武原真理子(監査室)



ことばに生きた感覚を

外国語学部ロシア語学科 村田 真一

非常勤講師時代と前任校勤務が比較の長かったためか、2004年に本学へ移ると、清々しさとデジャヴ感が波打ち始めました。

在職期間の半分ほどは、ヨーロッパ研究所長、ロシア語学科長、外国語学部長、言語科学研究所委員長として、寛大な先生方や頼もしい事務職員のみなさんとともに、組織や制度の整備・改変を推進しました。

日々彩りと充実感を与え続けてくれたのが、学生と分かち合う時間です。200人近くが集った卒論「必修」のロシア文化ゼミとロシア文化・文学ゼミでは、4カ国で6回の合宿を実施し、北大や東大との研究交流も重ねました。また、専門を活かした語劇指導により学部語劇祭を立ち上げ、ソフィア合気会、サッカー部、ライフセービングの顧問と体育会連合会長も務めました。年3、4回の国内外での学会発表で得た知的刺激も授業へ還元できたように思います。学生のみなさんに強く願うのは、外の世界へしっかり目を向け、ことばに生きた感覚を吹き込んでほしいということ。走り続けた21年が短かったとは言いません。「先生にはもっと動きやすい職場が向いているかも！」と虚を突かれたもの今は昔。熱心な学生や魅力的な教職員とのワークする饗宴の余韻を噛みしめ、心温まる送り出しの会を素敵に演出して下さったたくさんの方々感謝するばかりです。

時間でできた人生が旅をいざないます。遙かな地平線を臨む機内のように、日常が下方へ流れ去り始め、彼方にはスターダストがほのかに揺らめいていません。



歩み続けた日々と 出会いへの感謝

総務局環境整備グループ 大日方 賀代子

定年退職を迎えるにあたり、多くの方々との出会いに感謝申し上げますとともに、長い在職期間、皆様に支えられ、今日まで職務を続けることが出来た事を心より御礼申し上げます。

社会人のスタートは23人の同期との出会いから始まりました。皆さんは、最年少で生意気な私を可愛がってくれ、導いてくれました。私が上智学院に最後まで残った一人ですが、一部の方々とは今も交流が続いています。

最初の配属先は財務部でした。当時、伝票は手書きの複写式、予決算の計算書類等資料は電卓・そろばんでの計算による作成、書類は和文タイプライターで文字を一つひとつ打つなど、ほとんどが手作業の時代でした。今や技術は格段に進歩し、業務の効率化が図られ、仕事の高度化も進みましたが、当時、職場の皆さんと大騒ぎをしながら作業をし、夜遅くの残業ともなると出前の食事をとりながら歓談、また作業に戻る…手間と時間はかかりましたが、職場に一体感があり楽しかったことが今も思い出されます。その後、8つの部署を経験しました。特に、施設の管理運用関係の業務に長く携わりましたが、ここでの多くの経験は忘れがたいものとなりました。

また在職中、二度の出産と育児も経験しましたが、職場の皆様温かさに支えられ、上智学院の寛容さを強く感じました。在職中、貴重な経験と学びを得る事が出来た事を深く感謝申し上げますとともに、大好きな上智学院が、これからも益々発展されます事を心から祈念いたします。



起業家マインドを もって挑戦を！

高大連携担当副学長
西澤 茂

ご卒業、ご修了、おめでとございます。

現在のビジネス環境は、1990年代初頭のインターネット革命に匹敵するほど、劇的な変化の渦中にあります。ChatGPTをはじめとするAI技術は、このわずか2～3年で急速に発展し、さまざまな分野で活用されるようになりました。知的労働の多くがAIに代替される一方で、新たな仕事や価値創造の機会も生まれています。

こうした時代の変革期において、求められるのは「起業家マインド」です。ある企業では、従業員数を半減し、削減した社員には起業を促すという決断を下しました。これは、単に組織に属して安定を求めるのではなく、自ら挑戦し、新たな価値を生み出す姿勢が重要であることを示唆しています。

卒業生の皆さん、ぜひ起業家マインドを持ち、自らの手で未来を切り拓いてください。



さわやかな 非常識人に

外国語学部長
木村護郎クリストフ

大胆な発言や政策で日々、世界を驚かせている大国の指導者がいます。行き詰まった課題を解きほぐすためには、従来の常識を超えることも必要でしょう。それが、支持され期待される一つの理由にちがいません。しかし、自己中心、身内びいき、異なる意見の弾圧や蔑視、力の支配、事実と異なる主張、といった方向性が解決につながるでしょうか。問題は他のところに押し付けられ、あるいは抑え込まれ、溜まっていつか爆発する……。

時代の閉塞を本当に打開しようと思ったら、先例にとらわれない発想や行動力と共に、全く逆の方向性が必要になるはず。異なる意見にも広く耳を傾け、弱い立場に心を寄せて、公平な法の支配を守り、都合の悪い事実から顔をそむけない。上智で学んだみなさんが、そのようなさわやかな非常識人になることを願っています。



新たな道を進む 皆さんへ

総合人間科学部長
酒井 朗

ご卒業、ご修了おめでとございます。

学生生活はいかがだったでしょうか。新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの制約を受けたことと思います。そんな中でも学業に励み、多様な活動に取り組まれた皆さんに、心より敬意を表します。新たな環境でのさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

これから皆さんは、それぞれの新たな道を歩み始めます。その中で困難や悩みと直面することもあるでしょう。そんなときは、一人で抱え込まず、周囲を頼ってください。これまで自分の力で乗り越えてきた方も多いかもありませんが、誰かの支えを受けることもまた、大切な力の一つです。

皆さんの未来が、希望に満ちたものとなることを心より願っています。



Cherish a Positive Mindset!

グローバル化推進担当副学長
森下 哲朗

Congratulations on your graduation!

As you embark on the next stage of your journey, you will likely encounter many failures, setbacks, and even unfair situations. But that is simply a part of life. What truly matters is how positively you can approach these challenges, as this mindset will shape your future growth. Hiding your failures or lamenting the past will not lead you forward. It may not always be easy, but I encourage you to cherish a positive mindset. If you ever find it difficult to do so alone, remember that the friends and mentors you met at Sophia University will always be there to support you. Wishing you a bright and fulfilling future!



言葉を大切に しよう

文学部長
寺田 俊郎

入学以来みなさんが学んできた大切なことの一つに、言葉によるコミュニケーションがあります。討論、発表など口頭での言語活動、レポート、論文など文書での言語活動を通じて、言葉を介して他者を理解し、自己を表現し、共同で新しい知を創る修練を重ねてきました。しかし、日本社会では未だに、非言語コミュニケーションが幅を利かせています。「空気を読む」「察する」「忖度」などの表現が好まれ、言葉で明確に表現することが疎まれることもあります。親しい人同士の非言語コミュニケーションは麗しいものですが、公共空間でのそれが誤謬を生んだり弱者を抑圧したりすることは「日本人ならわかるだろう」などの言説を見れば明らかです。言葉は万能ではありませんが、言葉を丁寧に使って相互理解を図ることをどこまでも、いつまでも、大切にしてください。

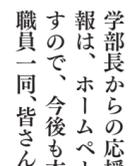


ソフィアンとして の絆を大切に

理工学部長
澁谷 智治

卒業・修了おめでとございます。

高い志を抱いて本学に入学した皆さんは、立派に学問を修め、それぞれの希望を胸に新たな進路を目指すことになりました。本学での学びの中で培った力は、家族や隣人を幸せにし、より良い社会の実現に大いに役立つものと信じています。しかしながら、これまでの友と別れて新たな道に踏み出すことには、大きな不安が付きまとうことも事実です。その不安は、多くの先輩ソフィアンも感じてきたことであり、だからこそ、今後の人生で生じる皆さんの不安を、社会で活躍する先輩ソフィアンがきっと受け止めてくれることでしょう。そして、皆さんが次世代ソフィアンを迎え入れるときまで、ソフィアンとしての絆を深めていって欲しいと思います。希望に満ちた未来が開けることを願っています。



卒業するみなさんへ

ご卒業(修了)おめでとございます。4人の副学長と9人の学部長からの応援メッセージをお届けします。最新の大学の情報は、ホームページやSNSを通じて積極的に発信していきますので、今後も本学の活動や取り組みを応援してください。教職員一同、皆さんの今後の活躍を心からお祈り申し上げます。

副学長・学部長からのメッセージ



上智大学卒業生の 誇りをもって、 それぞれの未来へ。

法学部長
田頭 章一

ご卒業を心からお祝い申し上げます。学位授与式を迎えるにあたり、卒業生の皆さんはそれぞれの学生生活を振り返り、さまざまな感慨をいだいていらっしゃることでしょう。上智大学在学中は、学位記に示された学業の成果だけでなく、大学内外で得た知識や経験、信頼できる教師や友人など、かけがえのない「財産」を得られたものと思います。これらの財産は、皆さんが今後社会で活躍する際に、必ず力を与えてくれるはずです。順調な時だけでなく、なかなか前に進めない時にも、否否のような時にこそ、大学生活で得たことを思い出してください。

意志があるところには、無限の可能性があると信じます。上智大学の卒業生であることを誇りとして、また「他者のために、他者とともに」の精神を忘れずに、自分自身の未来を力強く切り拓いていってください。



いつかまた、 上智大学へ！

経済学部長
竹之内 秀行

皆さんの学生生活における変化の一つは、生成AIの登場だったのではないのでしょうか。この技術は、これからの皆さんにも大きな変化をもたらすことでしょう。

4月からそれぞれ新しい道を歩み始めますが、そこには新しい人々との出会いやさまざまな出来事が待っています。どんな出会いや出来事も、皆さんの一部となり、深く染み込んでいくことでしょう。そうした変化を楽しみながら、新しい環境に向き合ってみてください。

そして、丸の内線の車窓から真田堀が見えたり、新宿通りを過ぎるとき、ふと思い出していただけるとうれしいです。いつの日か、また上智大学に足を運んでいただけることを心から願っています。

これからの皆さんの未来が、実り豊かで充実したものであることを、心から祈っています。



母港を照らす光と なって

学生総務担当副学長
永井 敦子

本学卒業生に対する企業人からのレビューーションには、「知的」、「スマート」等に加え、「押しが弱い」といったニュアンスの評価もよくあります。イメージ的な面があるにせよ、他者からの見え方に傾聴すべき点はあるでしょう。ただ上智生に接する身としては、「人の魅力を見つめるのが上手」という点も加えたいです。一見他人には無関心そうな人が、クラスの友人の隠れた魅力を楽しそうに語るのを聞くのは嬉しく、柔らかな気持ちになります。その人が生きていることを言祝ぐ(ことばく)気持ち伝わってきます。先日海洋博物館で、灯台のレンズの、照らすことを極めたその造形美に感動しました。これからも上智大学という母港は、皆さんそれぞれの個性が生み出す静かで暖かな光によって、照らされ続けてゆくことでしょう。



活かせ！ グローバルマインド

総合グローバル学部長
都留 康子

ご卒業おめでとうございます。FGSで育んだグローバルマインドは、職種や場所は問いません。それぞれの未来、そして社会に活かしていってくださることを期待しています。

皆さんには、大学生であることによって享受してきた特権がなくなり、いろいろなことが待ち受けていることと思います。時間的な自由がなくなり、我慢を強いられることもあるし、許しがたいと拳を振り上げたくなる時もあるでしょう。そうした時、立ち止まること、振り返ることを怖れないでください。自分を大切に、時には、頑張る自分を褒めてあげてください。自分を大切にできてこそ、他者を理解し、尊重することもできるのです。

そして、人生は一生勉強です。また学びたくなったら上智に立ち寄ってください。



希望のうちに歩む

神学部長
川中 仁

今年度修了・卒業の皆さんは、入学当初にコロナ禍の直撃を受けましたが、先の見えない状況の中で忍耐強く歩み続けることで道を切り開いてきました。これから始まる人生の歩みの中で、皆さんは数々の試練にぶつかることでしょう。あるいは、コロナ禍を遥かに超えるような試練が待ち受けているかもしれません。ですが、乗り越えることのできない試練はあきらめられません。希望のうちに歩み続けるならば、いかなる試練も必ず乗り越えることができます。折しも2025年ローマ・カトリック教会は、「希望の巡礼者」(Peregrinantes in Spem)という標語のもと、希望の特別聖年を祝い、希望のうちに歩むことへと招いています。今皆さんの前に大きく開かれた未来において、いかなる困難な状況にぶつかろうとも、決して希望を失うことなく力強く歩み続けてください。



点滴石をも穿つ

学務担当副学長
伊呂原 隆

ご卒業おめでとうございます。はなむけに私が好きな言葉を送ります。「点滴石をも穿つ(Constant dropping wears away the stone.)」。小さな水滴でも絶えず落ち続ければ石にさえ穴をあけることができるという意味で、日々の小さな努力がいつの日か想像もしなかったような大きな成果を生むことを示しています。社会人となり、新たな夢の実現に向かって邁進しようとしている皆さんにとって大切なのは、最新のAIを使った楽で効率的なツールなどではなく、地道な日々の弛まぬ努力です。人生百年時代を生きる基盤を本学で身につけた皆さんです。どうか大学卒業後も生涯にわたってしっかりと学び続けてください。急激に変化しているように見えるこの世の中でも、我々人間にとって本当に重要なことはそれほど変わっていないのではないかと私は思っています。皆さんのご活躍をお祈りします。



Remember to Share and Give Back!

国際教養学部長
Angela Yiu

Congratulations on joining the Club of Seven! If the world were a village of 100 people, only less than 7 persons have a college education. Our success is a combination of hard work and good fortune: for being born at the right place and the right time. We must be less judgmental of those who are not as fortunate and accomplished. We must not blame failure and poverty on personal responsibility alone because not everyone has the same starting line. Be generous and considerate. As a society, we must share and give back. This is how each of us will make a difference in our lifetime.



岡田 隆 学術研究担当副学長 ありがとうございました

岡田副学長が2月22日、急逝されました。

岡田副学長は2021年4月より学術研究担当副学長を務めておられ、上智大学の学術研究活動を推進する傍ら、総合人間科学部心理学科教授として学生指導にも尽力され、本学での学びを通じて新たな知を生み出し、巣立ってゆく学生の卒業・修了を心待ちにしておられました。教職員一同、ここに深く哀悼の意を表します。(計報記事は2面参照)

2024

就職状況

2025

就職活動

2024年度 就職活動の総括・本学の状況

大卒者の有効求人倍率は、1.75倍(昨年度1.71倍)で4年連続上昇した。初任給の引き上げや働き方の改善をアピールする企業も増え、「売り手市場」が続いている状況だが、一方で早期化する採用活動に十分な準備が整わないまま向かわざるを得ない学生も少なくなかった。3年次生のうちに、最初の内定をもらう学生は年々増加しているが、最終的に就職する企業からの内定は4年次生の5～6月がピークとなっている。学生優位の採用状況とはいえ、長期間にわたる就職活動で、学業や大学生活との両立に苦心した学生も多くあったと思われる。3月1日現在、進路決定届を提出した学生の進路満足度は、91.9%(就職者のうち「進路に満足」「やや満足」と回答した学生の割合)。3年連続90%を超え、高い数値となった。

■公務員

本学の国家公務員試験合格者は、総合職13人(昨年度13人)、一般職32人(昨年度22人)。全国的傾向として国家公務員試験の申込者は減少が続いており、合格率は上がっている。一方、昨年度から受験可能年齢が引き下

げとなった総合職教養区分に関しては申込者は増加の傾向にある。

25年度の試験日程は24年度から変更があり、東京都と特別区のテストセンター方式試験が3月に実施される。その他の地方公務員も全体的に早期日程を予定。国家総合職は3月中旬、国家一般職及び外務省専門職は5月末頃に選考開始。全般的に、公務員1次試験が民間企業の採用活動本格期に重なる。併願を考えている学生は、双方のスケジュールを見据えた対策と準備が必要となる。

昨年度に引き続き学内で開講した公務員試験対策講座は、対面型講義に一部WEBを取り入れたハイブリッド形式で実施。45人(昨年度52人)が受講した。25年度も対面型講義を中心とし、5月下旬から開講予定。

■教員

教員志望者は全国的に減少しており、本学も同様の傾向。本学の今年度の教員就職者は、公立・私立合計で約20人(昨年度約30人)。試験時期を早めた学校や自治体が増えつつある。教育実習や企業への就職活動時期と重なるため、計画的に準備を進めることが必要。私立の非常勤講師の採用は10月頃から本格化し年度末まで続いた。

■理工(技術系)学生

企業の技術系学生への関心は専攻を問わず高く、特に電気・情報系に対して高い傾向がみられた。学校推薦選考ではジョブマッチング選考を行う企業が多く、志望職種への適性やキャリアプランが問われた。一方、技術系人材へのニーズ高まりを背景に、コンサルティング業界など、自由応募でよりよい勤務条件やスキル獲得を求めて活動する学生も増えている。

■外国人留学生

外国人留学生は学業や日常生活への適応に時間がかかることが多い。日本の採用スケジュールに間に合わず、卒業後に就職活動を継続する学生も少なくないので、早めからの準備が必要である。留学生向けのガイダンスは多数用意しているので、ぜひ利用してほしい。

■留学経験学生

留学希望者の活動は、留学前から就職活動の準備をしたうえで留学中でのオンライン選考に臨む、海外の就職フェアを利用する、帰国後すぐに就職活動に取り掛かるなど、活動の時期や形は様々になっている。留学経験者は例年、就職先に対する満足度が高い。留学時期に合わせたガイダンスや海外からのオンライン相談にも応じている。活用してほしい。

2025年度 就職活動の現況・見通し

■2026年3月卒(主に新4年次生)

企業の新卒採用意欲は引き続き高いとみられている。本学は例年早め以内定をもらう学生が多い傾向にあるが、留学や公務員・進学からの方向転換など、さまざまな理由で7月以降に進路を決める学生も2割ほどいる。秋採用、通年採用に切り替える企業も増えており、6月以降にキャリアセンターに届く優良な求人も多い。周囲の状況にむやみに焦ることなく、キャリアセンターを活用してほしい。

■2027年3月卒(主に新3年次生)

キャリアセンターでは3月13日に実施した「新3年生のためのキャリアガイダンス」から本格的な支援を開始した。今後も、インターンシップガイダンス、自己分析、エントリーシート対策、筆記試験対策、OBOG交流会、模擬面接など、その時期に応じた各種セミナーを開催する。何に参加していいかわからないという学生は、まず年に複数回開催される「総合ガイダンス」に参加してほしい。その時に必要な情報や最新情報が提供され、活動のペースメーカーとしても役立つと思われる。キャリアセンターの情報は、すべてオンライン上の専用サイト「WEBキャリアセンター」で告知する。個別相談やガイダンスの申し込みや、本学宛に届いた求人・インターンシップの検索・閲覧もできる。

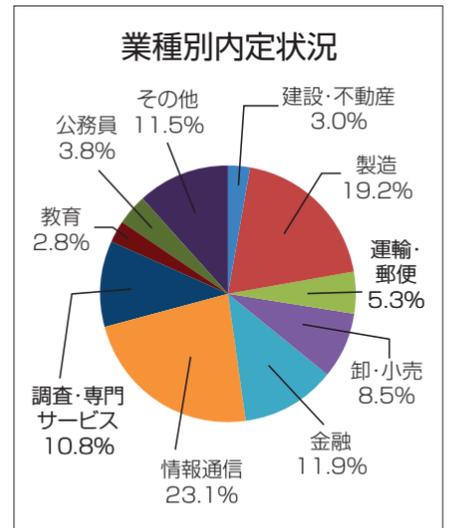
内定者数上位企業一覧(2025年3月1日現在)

Table with 3 columns: Rank, Company Name, Number of Offers. Lists top 40 companies like NTT Data, Akita Chemical, etc.

Table with 3 columns: Rank, Company Name, Number of Offers. Lists companies from rank 55 onwards, including KDDI, Anderson Mori & Tomita, etc.

業種別内定状況一覧(2025年3月1日現在)

Table with 2 columns: Industry, Number of Offers. Lists industries like Construction, Manufacturing, etc.



Profile of 濱元 葵 (Miyamoto Aoi), a student who became a public servant. Text: '1人で抱え込まない'.

Profile of 八鳥 理子 (Yatsumi Riko), a student who became a lawyer. Text: '素直が一番!'.

金・ルビー・銀・銅祝式典

卒業後の節目を祝う

2月22日、四谷キャンパスで、金・ルビー・銀・銅祝式典が挙行された。この式典は、卒業後50年(金祝)、40年(ルビー祝)、25年(銀祝)、15年(銅祝)の卒業生を招待して祝う大学主催の行事。式典後には、立食形式の祝賀会が開催され、旧友との再会を懐かしむ卒業生でキャンパスは賑わった。

今年度は、金祝(1974年卒)348人、ルビー祝(84年卒)389人、銀祝(99年卒)293人、銅祝(09年卒)357人、合わせて1,387人の卒業生が四谷キャンパスに集まった。式典には、暁道佳明学長、サリ・アガスティン理事長および鳥居正男ソフィア会会長が登壇し、全員で校歌を斉唱し始まった。



金祝代表として謝辞を述べた白石和子さん(1974年外露卒)

暁道学長は式辞で、卒業生が長年にわたり物心両面で支えてくれていることへの感謝を述べた上で、大学の近況を報告。「先人達の長年の努力、そして卒業生の皆様一人一人の歩みこそが本学の必然性ある発展を導き、その発展の流れを世に示してくださって

います。国際的な教育環境の増強や様々な立場の人が集まる多層的な学びの空間の構築により、本学はこれからも発展し続けていきます。卒業生の皆様の本学を思う羽ばたきが、在学生の大きな羽ばたきを導いてくれます。これからも皆様の頭の片隅に本学を置いていただくことが、本学の何よりの励みになります」とさらなる協力と支援を呼びかけた。続いて、各祝の代表者にラテン語で記された祝状と花束が贈呈された。

次に登壇したアガスティン理事長は、各祝の卒業生の在学中の出来事を振り返り、各祝の「祝」にあたる「Jubilee」のラテン語「Jubilum」が「喜びの叫び」の意味であることを紹介。式典で喜びの叫びを共にできることに感謝すると共に、日本のみならず国際社会へ貢献する卒業生に敬意を表した。そして、「本学は先輩ソフィア

ンの皆様からの母校愛を受けて発展しています。皆様のご支援に御礼申し上げますとともに、引き続き本学へのご支援ご協力をお願いします」として、挨拶を締めくくった。

鳥居ソフィア会会長は、「おかえりなさい」と呼びかけ、家族もソフィアンであることや母校への貢献・卒業生同士の懇親を胸にこれまで築かれてきたソフィア・ファミリーの絆について触れ、ソフィア会はいつでも卒業生の来訪を歓迎していると述べた。

続いて、各祝の代表者から謝辞があり、在学時の思い出や同期への想い、そして上智大学で学んだことが今の自分を形作っていることなどが語られた。

式典の最後には、体育会応援団による祝賀パフォーマンスが披露された。応援団からのエールに、会場は大きな拍手と笑顔に包まれ、華やかな雰囲気の中、式典は終了した。

2024年度学長賞

個人1人と1団体が受賞

2024年度学長賞の受賞者が決定した。同賞は、創立100周年記念事業の一環として2009年に設けられた学生表彰制度。本学の学生または学生団体の、スポーツ、文化・芸術、環境、地域・社会貢献、国際交流、ダイバーシティ・共生などの各分野において他の模範となる優秀な成績を収めた者、本学の名誉向上に著しく貢献した者を顕彰するものである。

今年度は個人1人と1団体が受賞。受賞者および受賞理由は、次のとおり。

■ホセイ有栞(総教2)

SPSF) / 上智大学体育会

水泳部に所属し練習を重ねる中、2024年第33回

オリンピック競技大会(パリオリンピック)の競泳競技(50m自由型)にパラオ代表として出場し、自己ベストを更新する快挙を成し遂げた。本学学生のオリンピック出場は過去に例がなく、国内外における本学のプレゼンスを著しく高め、本学の名誉高揚に貢献した。

このほか、体育会が主催する「ソフィアスポーツ大賞」を受賞し、また本



学SSIC(Sophia Student Integration Commons)の企画では、体育会以外の上智学生へも大会の経験を伝える活動を通じて成果を還元しており、学内への貢献度も高く評価された。

■法学部法律学科 国際

取引法ゼミ(19人)(代

表: 深江夏蓮・法法4) /

第23回大学対抗交渉コン

ペティション総合2位、英語の部第3位、日本語の部第2位を受賞。日本語の交渉の部では最高得点を記録した。

大学対抗交渉コンペティションとは、毎年1回、2日間にわたって行われる仲裁・交渉の大学対抗戦で、今年度は日本の20大学とオーストラリアやシンガポールなど海外からの9大学、合計約300人が参加した。日本語の部と英語の部があり、国際取引法ゼミは日本語の部に3チーム、英語の部に1チーム、計4チーム19人が出場し、総合成績で29チーム中第2位という本学歴代最高の成績を収めた。また、日本語の交渉の部では第1位、日本語の部の総合第2位、英語の部の総合順位でチーム・オーストラリア及びシンガポール国立大学に続いて第3位(日本の大学でトップ)を獲得したことが高く評価された。



13大学で協働する大学連合に参画

Well-beingの実現と社会課題の解決に挑む

本学は、2月17日に設立された「共助資本主義の実現に向けた大学連合(SOLVE!)」(以下「大学連合」)に参画する。共助資本主義とは、23年4月に経済同友会が新しい経済社会モデルとして提唱したもので、民間主導で構築する成長と共助の両立を目指した日本ならではのWell-beingの実現を創出する。大学連合では、経済同友会やNPO団体、スタートアップ企業と連携し、産学官民の垣根を超えて社会課題の解決に向けた教育プログラムの提供をはじめとする共助人材の育成及び交流、研究プロジェクトを協働実施していく。

この取り組みは、本学の暁道佳明学長と東京大学の藤井輝夫総長が発起人となって呼び掛け、東北大学や早稲田大学など13大学が賛同し参画している。今後、所属大学に関係なく参加可能な社会課題解決型プログラムのほか、社会起業支援プログラム、ソーシャルセ



暁道学長が発起人となって呼び掛けた

クターとの連携、震災復興ボランティア、各種インターンシップなど、多岐にわたる取り組みを予定している。

暁道学長は「社会課題の多様化といきすぎた資本主義経済など、社会が複雑化するなかで、企業やソーシャルセクターが連携し、さらに大学連合が加わることで、若者による社会課題へのアクセスが容易になる。経済界、NPO、インパクトスタートアップ、大学というセクターを超えた新しい取り組みに現在注目が集まっており、大学が有する高度な知見の活用や、教員・学生の参画にも大きな期待を寄せている」と話している。



目的を明確に

互井 夕稀

(総4)

外務省 内定

就活の過程ではたくさん壁がありました。公務員試験の勉強が思うように進まず落ち込んだり、民間就活との両立に悩んだり、目指す進路が自分に向いていないのではないかと感じることもありました。そのたびに、ついネガティブな思考に陥ることもありました。特に、公務員を目指す方の中には、周りの就活状況と比較して焦りを感じながら勉強を進めている方も多いのではないのでしょうか。

試験や面接を控える中で、不安を抱えていない人はほとんどいません。そのため、不安の中でもがいている自分を受け入れ、目的を見失わないことが大切です。私は、自分が何をやりたくて、なぜその仕事、その組織でなくてはならないのかを明確にすることを心掛けていました。自分自身と対話を繰り返し、また周りの友人と一緒に追求することで核となる部分が見えてきます。

逃げ出したくなった時、努力する理由を何度も思い出すことで最後までやり抜くことができると思います。また、その職業を目指したきっかけを忘れないようにして欲しいです。困難な状況で、あともう少し頑張るための原動力となります。



見えない将来からの逆算

小林 巧実

(外西4)

株式会社ニトリ 内定

私は将来を具体的に想像すること、そしてそこから逆算して考えることが苦手です。しかし同時に、就職活動においてこれが必須であるように感じました。スタートが遅かったこともあり、業界をあまり絞らずに各企業の取り組みや業界の展望について調べ、これまでの海外経験や大学での学びがどのように生かせるか、自分なりに逆算して選考に臨みました。その結果は35社からの「お祈りメール」でした。

何かを変えなければならぬと感じ、私は一旦自分がどのような仕事をしたいのかについてだけを考えました。そこで出てきた答えはとてもシンプルで、「海外とのつながりがある仕事」と「人の暮らしを豊かにする仕事」でした。ここまで抽象的なものを「就職活動の軸」と宣言することは少し気が引けましたが、この軸に沿って就活を進めたことで自分を偽らずに話すことができ、選考の通過率も上がりました。

この経験を経て、就職活動は想像した未来に自分を当てはめるのではなく、今の自分がどのような道を進みたいのかを考える、自分自身のためのものであると痛感しました。



サイの角のように

菊岡 駿一郎

(文国4)

学校法人立命館 内定

「サイの角のようにただ独り歩め」という、ブッダの言葉を聞いたことがあるでしょうか。群れることをしない(とされる)インドのサイになぞらえ、人間もまた群れるばかりではなく、一人で進むべき時があるという意味です。

今回この言葉を取り上げたのは、仏教の教えを説きたいからではありません。実は、私が就職活動をする際に大切にしていたのが、この「サイの角のようにただ独り歩め」という言葉だったのです。私は学校教員を目指して活動し、結果的にその道に進むことができました。しかし、教員を目指す仲間は周囲に少なく、時には不安を感じることもありました。そんなとき、この言葉が、「自分の信念や希望に従うべきだ」と私を勇気づけてくれたのです。

皆さんにも、「群れる」ことなく自らの道を選び取って欲しいと願っています。もちろん、就職活動で友人や仲間と協力することは大切です。しかし、他人と「群れる」ことで自分を見失ってしまうのは元も子ありません。時には積極的に「孤独」を選び取り、「サイの角のように歩む」姿勢を持つことも、重要であると信じています。

約90点の応募の中から決定 大学公式サステナブルTシャツ発売

3月3日から、学生によるオリジナルデザインをあしらった大学公式サステナブルTシャツが販売された。このTシャツは、生産時に発生する本来は捨てられるはずの裁断片を再利用した「リサイクルコットン」を一部素材として使用。さらに環境負荷をできる限りに抑えると同時に、労働環境にも配慮されたサステナブルなアイテムだ。

本企画は上智学院ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の学生職員らの、地球規模の課題に対して一度立ち止まり、自分事として考える機会を創出したいという想いから、繊維商社のタキヒヨー株式会社の協力を得て実施に至った。

学生・教職員からデザインを募集し、約90点の応募の中から最優秀賞に選ばれたのは、亀山愛華さん(国教3)の作品。双葉の形状に「Sophia」と「Sustainable」のSを融合させ、本学の持続可能性に対する強い意識や多彩な取り組みを強調したデザインで、中心にある植物の発芽は上智生や教職員が授業での学びや課外活動等での実践を通して社会問題の解決へと向かっている姿勢を描いた。また、背景に地球を取り入れ、大学での取り組みが日本にとどまらず、地球規模の課題解決にも直結していることを訴求している。

1月16日には授賞式が執り行われ、サリ・アガスティン理事長から亀山さんには目録が、特別賞の受賞者には



最優秀賞の他、特別賞には3人が選ばれた

募したデザインが印刷されたTシャツが手渡された。さらに、1月16日～30日の期間中には、2号館1階エントランスで今回商品化には至らなかったデザインを飾った展示会を実施した。

今回のデザイン公募を立案した学生職員の綱澤快さんは、「今回のデザイン公募では、予想を超える多くの作品が集まり、それぞれのデザインに込められたサステナビリティへの想いや独自の視点に驚かされました。今後もこの取り組みがさらに広がり、サステナブルな選択が当たり前となる未来を目指していきたい」と振り返った。

【サステナブルTシャツ販売詳細】

販売場所：2号館地下1階パティネ・スポーツ
価格：2,300円(税込)



在学生の保護者・保証人向けのLINEアカウントと特設ページが開設しました

在学生の保護者・保証人の方々を対象としたLINEアカウントを開設しました(これまで運用していた公式LINEアカウントは終了となります)。保護者・保証人向けのニュース定期配信やその他配信により、さまざまな情報をお届けします。ぜひ友だち登録をしていただき、4月からの配信をご覧ください。

また、LINE開設に合わせ、保護者・保証人の方々に知っていただきたい情報や、よくあるお問い合わせなどを整理したウェブページを公開しました。「上智のことは、まずはここを見ればよい」と思っただけのよう、今後もページの充実化を図る予定です。こちらも是非、ブックマークをよろしくお願いたします。



LINEのお友だち登録

LINEのお友だち追加をお願いします



保護者・保証人向けページ

ウェブでも情報の充実化を図ります



ひと ヨットと向き合い得られた人生の糧

「風力だけで水面を走る気持ち良さは、他では得られないですね。大自然と一体化したような、不思議な爽快感がたまりません」ヨット部に所属する沖愛海さん(文史4)は、その魅力についてこのように話す。ときとしてモーターボートよりも速く走るといふヨットは、帆で追い風を受けて進むだけでなく、揚力を利用して風上方向に進むこともできる。

競技としてのヨットはセーリングと呼ばれ、海上に設置されたブイ(目印)を定められた順序で周り、ゴールまでの着順を競う。風向きや風速が刻一刻と変化するなか、俊敏な帆や舵の操作が求められる。「ヨットは体力と頭脳を使う戦略のスポーツです。波の動きや潮の流れも読む必要があります。判断や操作を誤れば転覆して海に投げ出されることもあります」

優雅なヨットのイメージとは裏腹に、セーリングの争いは熾烈だ。より良いスタートを切るため、スタート前から位置取りの攻防戦が繰り広げられ、怒号が響くことも少なくない。そのようなタフな環境下で、沖さんは心身ともに鍛え上げられてきた。「多少のことでは動じなくなりましたね。顔つき含め、入部前に比べてたくましくなったと言われます」



文学部史学科4年生 沖愛海さん

沖さんが毎週末通う湘南海岸。力強い海風を求め、関東中からセーラーが集う。普段では出会うことのない幅広い世代の人から、ヨットを通してたくさんの刺激を受け、何度も助けられてきた。「他大学の部員は、ライバルでもあり、仲間でもある。競技人口が少ない分、自然と仲良くなりますし、付き合いも濃くなります」

未経験の世界に飛び込み、ただひたむきにヨットと向き合うことで自分を信じる力に変えてきた。「初心者だった自分が全日本に出場できるとは思いませんでした。自分の限界を知らず知らずのうちに決めてしまうのはもったいないですよ。自然相手に思うようにいかない理不尽さも、いざという時に支え合える仲間も、人生に必要なものはすべてヨットを通して得られたような気がしています」

上智大学通信フルリニューアルのお知らせ 創刊号は今夏発行予定

総務局広報グループ発行の『上智大学通信』は、大学と学生およびそのご父母・保証人、教職員とのコミュニケーションを深めることを目的とした広報媒体です。

本紙の創刊は1968年(昭和43年)12月17日でした。当時の四谷キャンパスは学園紛争の混乱の中、故守屋美賀雄学長から学生に発せられた「全学学生諸君に訴える」(その1~3)が本紙の始まりです。その後、機動隊の出動や6ヶ月間の休業宣言などを経て、翌年1月25日に発行した第4号からは『上智大学通信』の題字を掲げました。休業期間中に在学生の各家庭宛てに送付し、大学内の問題や情勢をお知らせする広報紙となりました。

そこから半世紀以上に亘り、大学の教育研究活動の状況、学生や課外活動団体の活躍、諸行事やイベントなど、さまざまな角度から大学の魅力をお伝えしてきましたが、2025年度、内容や形式を一新してフルリニューアルする運びとなりました(新名称は未定)。

新しい広報誌では、タブロイド型から冊子型へ変更となり、合わせて日本語・英語の両表記やデジタルブック形式でのウェブ公開も行うことで、幅広い読者がアクセス可能となります(URLは追ってお知らせいたします)。

今後は、本学の取り組みや魅力をより効果的に発信し、国内外の読者の皆さまにとってさらに親しみやすい媒体を目指します。創刊号は2025年夏にお届け予定です。新たな広報誌にどうぞご期待ください。

長年にわたるご愛読に、心より感謝申し上げます。



上智大学通信創刊号となる、「全学学生諸君に訴える」(その1)



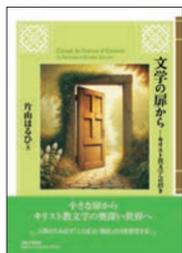
「上智大学通信」の題字が掲げられた第4号

SUP 上智大学出版 新刊紹介

ぎょうせいオンラインショップ、全国主要書店および紀伊國屋書店上智大学店で販売中。



■『死と再生の臨床心理学』
横山恭子、長堀加奈子【共編】
(2,400円+税)



■『文学の扉から
—キリスト教文学への招き』
片山はるひ【著】
(2,500円+税)



■『ダダを超えて
—ラウル・ハウスマンと
ポストダダ群像』
小松原由理【編著】
(2,300円+税)



ぎょうせいオンラインショップはこちらから